

私の好きな食べ物の中の一つに、おにぎりがある。

他人から見れば、私は副食に好き嫌いが多く、いつも言われているのである。

毎夕食後には、介護員さんから、明日の献立を知らされるのである。その時、あゝ明日の夕食のおかず悪いわーと、明日の夕食は、おにぎりにしてもらおうと心に誓うのである。

私のおにぎりは、普通の人とは違っていて、小さく握ってもらわなければならないのである。

三十年ほど前に、私は口唇の整形手術を受けたのであるが、半失敗のおかげで口が小さくなってしまったのである。その故で、人並みなおにぎりでは、食べられない運命を背負っているのである。

私のおにぎりは、一食分の御飯を十八個から二十個ぐらい作るのが丁度よい。そして、その形は少し細目の方が食べやすいのである。

今日も、夕食に作って頂いたおにぎりを自分の部屋に持ち帰って、まずは安心。八時頃になると私はテレビを見ながら、おにぎりをゆっくりと、ゆったりと、満足感を味わって食べるのである。そして

「今日のおにぎりは上出来だわい」と、一人ほくそえんでいるのである。

私が子供の頃、母が握ってくれたおにぎりの味が世界中で一番おいしかった。と、その頃が甦るのである。

だれだったか忘れたけれど、おにぎりを握れるのは人間だけであると言っていた事を思い出すのである。

近年、機械化が進んで、お寿司とか、おにぎりとかを握るといわれているが、機械が握ったおにぎりは、一粒の米が背中合わせになって他人行儀な、まとまりのない味である。それにひきかえ、人間の手で子供のため等に握るおにぎりは、その人その人の手の中のぬくもりや、おもしろいや、人間らしい涙とが温められ、ほんわかと一つの宝になって、味のあるおにぎりとなるのである。

握り飯は永久に人間だけが握ることのできる、他人への愛の証、でもある。

それと同時に、こうした人間と人間とを結ぶ絆の食べ物だと信じながら、今夜も介護員さんに握って頂いたおにぎりを瑞穂の国に生まれた運命に、感謝している療養者の一人である。